

週刊 武四郎

第 22 号

2018 年 (平成 30 年) 9 月 5 日 (水)
発行・松阪市

●毎月第一週は、
松浦武四郎の人となりについて
ご紹介いたします

監修・松浦武四郎記念館

家内が僕をいじめます

武四郎さんが、へとうん 夫人と結婚したのは四十二歳の時でした。新婦の方は三十二歳ですから、当時としてはずいぶん晩婚です。この結婚、とう夫人の方が積極的だったといえます。武四郎さんを見初めたとう夫人は、周囲の反対を押し切り、親からの勘当ものともせずに嫁に来た、という逸話が残されています。どこまで本当かわかりませんが、色っぽい話の少ない武四郎さんにしては珍しいエピソードです。

実は、とう夫人は二度目の結婚、最初の夫は尾藤水竹という学者でした。水竹のお父さんは寛政の三博士の一人尾藤二洲です(ちなみに頼山陽は水竹のイトコになります)。とう夫人は、はじめはこの水竹の弟子で、のちに後妻に入り、

水竹が浦賀奉行配下として浦賀詰めになった時に病で亡くなったあとは未亡人となっていました。貧乏に慣れているとう夫人は、学問もでき、家事全般拔かりなく、賢夫人の鑑みたいな女性だったそうです。この

とう夫人はキリスト教の信者であったという資料もあります。詳細は伝わっていません。武四郎さんは奥さんの信仰には寛容だったようです。二人の間には娘が誕生し、武四郎さんは生まれ故郷の一志郡にちなんで「一志」と名付けますが、このお

という可愛い盛りに病没してしまいます。夫婦の悲しみはいかばかりだったでしょう。

愛娘を失った夫妻の慰めは、故郷の松浦家から呼び寄せていた甥の娘おとくんの存在でした。

おとくさんは温順な娘で、厳格なとう夫人のお眼鏡にもかなったとみえ気に入られ……それどころか、女たちは結託して、時には武四郎さんをやり込めたりもしていたようです。

武四郎さんのこんな手紙が残っています。

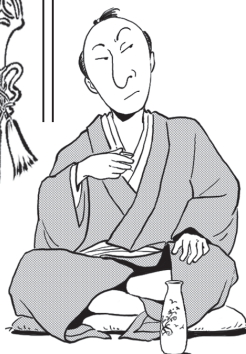
「おとく至極穩成氣質にて家内の氣に入りよろしく候、家内と極仲良しにて、僕をおりおりイジメ候には困り申し候也」



▲洪団扇(しぶうちわ)が張られた屏風の前で、左端・とう、右端・とく。
(松浦武四郎記念館蔵)

松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなる「北加伊道」を含む6案を政府に提案したことから「北海道の名付け親」と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

